

F.F.ショパン Fryderyk Franciszek Chopin

バラード第3番 変イ長調 Ballade Nr. 3, As-dur, Op. 47

1840 ~ 41年に作曲されたこのバラードは、P.ノアイユ嬢に献呈された。

作曲家ロベルト・シューマンは、この曲についてこう述べている。

「このバラードは、その形式、特徴において、あきらかに彼(ショパン)の初期の作品と相違して、最も独創性に富んだ創作に属しているといわねばならない。フランスの首都の貴族的環境に順応した、洗練された知的なポーランド人が、そのなかにあきらかに発見されるであろう」。

ショパンと同じポーランド出身の詩人 A.ミツキエヴィツの叙事詩にヒントを得て作曲されたと言われているショパンのバラード4曲のうち、シューマンが指摘したようにこのバラードは他の3曲に比べて繊細であるだけでなく、はるかに軽快で華麗、そして優美である。このバラードは「水の精」と名付けられた詩に着想されているといわれ、その詩の内容は、青年から永遠の愛を誓われた娘が、青年の誠意を試そうと湖の精に姿を変えて現れたが、彼はその誘惑に負け、湖の精に魂を奪われてしまう、というものである。

曲の構造は、コーダを伴う一種のソナタ形式と考えられる。メツァ・ヴォーチェで奏出されるリズムに特徴のある8小節の第一主題で開始され、へ長調の第2主題とともにこれらの主題が効果的な転調を交えながら展開してゆく。この曲の性格を特徴づけるのはなによりも、冒頭第2小節の後半にある顕著なアクセントをもつ音型や、第2主題が現れる前の最初に右手で奏でられるブロークン・オクターヴで、それらは曲の動機(前者は主動機)となって終始反復使用される。(山崎 翔)

L.v.ベートーヴェン Ludwig van Beethoven

創作主題による 32 の変奏曲 八短調 32 Variationen über ein eigenes Thema, c-moll, WoO. 80

ベートーヴェン中期の「名作の森」の中に屹立する、屈指の名作である。

1800年頃から難聴を患い、その苦悩は1802年にしたためられた「ハイリゲンシュタットの遺書」に如実に現れている。ピアノソナタの名作「熱情」は、この前年の作であり、この曲が作られた1806年には、弦楽四重奏曲「ラズモフスキー」がある。これらの曲にみなぎる緊張感は、この時期のベートーヴェンが置かれた精神の危機を反映したものに違いない。

主題は、簡潔で緊迫した和声進行からなり、右手による高声部は、旋律としての美しさよりも、左手の和声を印象づける役割を与えられている。この陰鬱なパトスを奏でる低声部の反復は、バロック期の伝統に連なる重厚なシャコンヌ様式を思わせる。そこには古典的な語法を導入しようとするベートーヴェンの意図を読み取ることができる。この作品に作品番号が与えられなかったのは、あるいはその大胆な実験的性格によるためかも知れない。

最終変奏を除いてすべての変奏で8小節の構造が保たれている。変奏ごとに右手と左手の音型が交互に現れる。まず主題提示と第11変奏までの前半部でひたすらに緊張を高める。中間の第12変奏から第16変奏では、一転して同主調の八長調で穏やかに変奏される。その様はあたかも解き放たれた魂が昇華していくかのようなのである。第17変奏でもとの八短調に戻り幾たびかの起伏を経て、第31変奏では左手の分散和音の上に再び主題が奏でられる。曲を締めくくる属和音と主和音という単純な二つの和音は、それまでに繰り広げられてきた劇的な一部始終の核たるものであり、それゆえに変奏曲全体に匹敵するほどの意味を持つものだと考えられる。

主題から繰り広げられる32の変奏の持つ多様性を十分に弾き分けて、自在に変幻する世界と、そこに凝縮する情念を表現したい。(松原 薫)

F.F.ショパン Fryderyk Franciszek Chopin

夜想曲第 18 番 水長調 Nocturne Nr. 18, E-dur, Op. 62-2

舟歌 嬰へ長調 Barcarolle, Fis-dur, Op. 60

ともにショパン最も後期の作品にあたり、長年連れ添ったジョルジュ・サンドとの不和や、いっそうすぐれぬ体調の中で 1846 年に完成された。夜想曲水長調(レント、4 分の 4 拍子)は、落ち着いた雰囲気の中に簡素だが優美で奥深い旋律が流れる主部と、一転して動きのある中間部との対照が非常に印象的な作品。舟歌(アレグレット、8 分の 12 拍子)は、ショパン最後の大規模なピアノ独奏曲として幻想ポロネーズ(Op.61)と双璧をなす作品であり、独特の詩情をたたえた旋律が滔々と流れる伴奏の上でどこまでもたゆたう。

すぐれたピアノ教師でもあったショパンは晩年、自らの方法論を書物にして出版しようという意欲を持っていた。完成には至らなかったものの、十数ページにわたる草稿(というよりメモ書きに近いもの)が遺稿として残されている。その中に、ショパンが音楽の本質について散文的に書き付けた一節があり、次のように書かれている。

「... 音によるわれわれの知覚の表現 / 音による思想の表現 / 音によるわれわれの感情の表出 / 人間の定かならぬ(模糊たる)言葉、それが音である ...」

ショパンはシューマンやリストら同時代の作曲家とは異なり、自分の作品にいわゆる「標題」を与えることはしなかった。現代では通称となっている「革命」「英雄」といった標題も、すべて友人や弟子によって考案されたものである。ショパンにとっては、作品のタイトルは曲のジャンル以上のことながらを意味せず、その点において「舟歌」というタイトルも、たとえばベニスの船頭歌といった具体的なイメージを念頭に置いていた、というよりは、「マズルカ」や「ワルツ」と同様にリズムの種類を表したものとして理解すべきであろう。ショパンにとって音楽とはあくまで、言葉では言い表せないもの、または言葉の限界を超えたものを表現する芸術であったのである。(中川 航)

M.ラヴェル Maurice Ravel

道化師の朝の歌(組曲「鏡」第4曲より) Alborada del Gracioso

モーリス・ラヴェル(Maurice Ravel)は 1875 年生まれ。スペインに近いフランス南部のバスク地方の出身。パリ国立高等音楽院でフォーレらに師事し、18 歳から 58 歳までの間にピアノ曲や管弦楽曲などを数多く作曲しました。

代表曲に

- ・《亡き王女のためのパヴァーヌ》(1899)
- ・組曲《マ・メール・ロワ》(1908-1910)
- ・組曲《クーブランの墓》(1914-1917)
- (以上はピアノ曲、後に管弦楽にも編曲)
- ・《ボレロ》(1928)(バレエ音楽)

などがあります。

《道化師の朝の歌 Alborada del gracioso》は、ラヴェルが 1905 年に作曲した、全 5 曲からなる組曲《鏡 Miroirs》の第 4 曲であり、後には作曲者自身により管弦楽にも編曲されています。この作品は(ラヴェルの母の祖国である)スペインの舞曲の影響を強く受けていると言われていています(ちなみに、《鏡》の他の曲はフランス語で題がつけられているのに対し、この曲の題名のみがスペイン語で書かれています)。私はスペインについてよく知らないので、この点をうまく表現できているかは自信がありませんが。

曲の構成としては、

(A) 8分の6拍子・軽快な踊りを中心に曲が展開する。

たまに8分の9拍子が混じる。

(B) 4分の3拍子。

内声がゆったりと歌う部分と、

高音と低音がリズムを刻む部分が交互に繰り返す。

2度の盛り上がりを経て、

(A') 再び8分の6拍子の軽快な踊りが始まる。

Aの旋律が再現され、その上でさらなる盛り上がりを見せる。

の3部からなります。

A、A'は二長調です(といっても頻繁に転調するので、二長調でない部分が大半です)。BではA以上に調性が安定しません。(なお、8分の6拍子と4分の3拍子は一見同じものに思えますが、基本的に前者は2拍子、後者は3拍子を意識して奏されるので、かなり性格の異なった曲調になります。聞き比べてみるとよいでしょう) (松本 雄也)

F.F.ショパン Fryderyk Franciszek Chopin

バラード第4番 ヘ短調 Ballade Nr. 4, f-moll, Op. 52

この曲は、ショパンが作曲した4曲のバラード(フランス語で物語をさす語が起源とされている。)中、最後の作品であり、1842年に作られた。この年は、ショパンの妻であるジョルジュ・サンドとの関係も良好であり、英雄ポロネーズ、などの傑作群が数多く生み出された年であり、ショパンの作曲家としての人生の中でも最も充実していた年である。それだけに、さまざまな作曲技法を駆使されており、内容的に難解であるのはもちろん、技巧的にも演奏困難である。

なお、ショパンはバラードを祖国ポーランドの詩人アダム・ミッキエヴィッツの詩に靈感を得て書いたとされるが、この4番のみ、着想のもととなったミッキエヴィッツの詩は知られていない。

最初、八長調の7小節の序奏から始まり、それに続いて、提示部では、ヘ短調で哀愁を帯びた、この曲の第1主題であるメロディーが2回奏でられる。その後変ト長調ながらも暗さをもったメロディーを経て第1主題が様々な和音を用いて、変奏され、経過的なパッセージを経て、コラル風の変口長調の第2主題に入る。第2主題の終止に続いて、ト短調のやるせなさを含んだピアノスティックなパッセージがあり、それに続いて舞踏的な軽やかな音楽が現れるなどの展開を見せる。その後イ長調で序奏の旋律が奏でられ、アルペジオを用いたカデンツァを経て、再現部において、対位的な手法を用いて第1主題が奏でられる。それに続き、こまやかなパッセージで、第1主題と第2主題が変奏される中で、円熟した技法とショパン独特の精妙な美しさによって、徐々に盛り上がりを見せ、和音の連続で、盛り上がりが高潮に達したところで、急に休止し、5つの和音が、荘厳な雰囲気をもたせた後、終始激しい怒涛のコーダに入り、最後4つの和音の強打によってこの曲を締めくくる。 (世古 隆蔵)

演奏者

山崎 翔(理科一類)

松原 薫(文科三類)

中川 航(大学院人文社会系研究科 基礎文化研究専攻)

松本 雄也(理学部数学科)

世古 隆蔵(文科一類)